

英語が注目した東アジア(1)

— OEDに収録された日本のモノとコトを表わす借用語彙調査 —

陳 永岐・山田高志郎

1. 本研究の背景および意義

21世紀も早、10分の1が過ぎ去った今日、世界の勢力の枠組みが大きく変化しつつある。この情勢の変化にあって、中国、韓国および日本を含む東アジアは国際社会で重要度を増してきている。このことは、経済や環境をテーマにする国際会議においてこの地域が無視できない存在になっていることからわかる。東アジアの成長は、欧米の一般市民の皮膚感覚においても実感できる状況にあると想像される。それは新聞や雑誌等の書籍、ニュース、テレビ、ラジオ、映画、インターネットなどの各種メディアを通じて、日常生活の中で東アジアに関わる情報が日に日に増していることが疑いもない事実だからである。

一方で今日の東アジアの生活に目をやると、クリスマス、バレンタイン・デーなどの年中行事、ブランドショップ、ファストフードなどの消費生活、自動車社会から町に溢れるアルファベット表記など「西洋化」「アメリカ化」が進んできているように感じられる。これらの現象は従来、東アジアの近代化が主として欧米の思想、技術、システムとともにそれらを表す言語表現を取り入れる形で進行してきたことと無縁ではないだろう。

しかし、東アジアと欧米の間の交流は一方通行的なモノやコトの流れでしかないのだろうか。答えは、先に見たように「ノー」である。今日の状況もさることながら、シルクロードを通じた相互交流などで少なからずモノやコト、そしてそれらを表す語彙が東アジアから欧米へ伝播していることも事実である。この事実は東アジアの各言語に欧米由来の借用語彙が存在し、逆に英語をはじめとする欧米諸言語の中に東アジアに起源を持つ借用語彙が存在することで確認できる。

本研究は東アジアから英語へ入った借用語彙をもとに、英語が認識する東アジア像を探求していくものである。その第一稿として、本稿は日本語から英語に入ったモノとコトを表わす語彙の借用度についての調査研究を行うものである。

2. 先行研究

管見の範囲では、日本語から英語に入った借用語に関わる先行研究は多くはない。入手

できた先行研究の内容は大方A意味分類、B借用法と綴り方、Cルーツと導入の歴史、D文化接触、E英語の借用語彙数、F英語への定着度の6つのポイントに亘っている。ここではポイントごとに代表的な例を挙げておく。

A意味分類にはChristopher P. Carman (1991)、早川勇 (2004, 2005a)、Nichlas W. WARREN (1994, 1995a, 1995b, 1996, 1997) などがある。ここでなされている意味分類には武器・軍事、植物、科学、ビジネス、日本製(品)などの項目が設けられている。B借用法については早川勇 (2006)、刘海霞 (2009) などがある。具体的な借用法のほとんどが音訳借用法 (transliteration)、意訳借用法 (free translation)、音意結合借用法 (combining transliteration and free translation) の3種類に分けられている。Cルーツと導入の歴史に関しては早川勇 (2003, 2006など) が長年に亘り英語に入った日本語の初出年を調査している。D文化接触に関しては葛西清蔵 (2008) が英語における借用の歴史、語種と語感の面から述べている。E英語の借用語彙数は、早川勇 (2005b)、松本直枝 (1999) などのように研究の過程として用いられている。F英語への定着度については、Garland Cannon (1992) が借用語の定着度を測る Assimilation Scale を提案している。その後、加野まきみ (2003)、早川勇 (2003, 2005b) が類似の尺度を用いて分析している。早川勇 (2003) は「日本語が英語の語彙体系に組み込まれる過程は次の4段階に分けられる。①ほぼ原語の段階→日本語を英語の文字によって表記するが、日本文の引用や日本語語彙の列挙として用いる。②外来語の段階→日本語から来たばかりで同化があまり進んでいない。③借用語の段階→日本語語彙で同化がかなり進み英米人が日常的に用いる。④本来語の段階→語源は日本語語彙であるが英米人もそれを意識せずに英語語彙として用いる」としている。A～Fの6つのポイントから1つまたは複数の点が各論文で取り上げられて、論じられている。

合計20点の英語に入った日本語の先行研究に当たってわかったことは、意味分類を行う上でも収集語彙を眺めて関係の近いものを集めてからまとめやすい特徴のみを述べており、方針を持って分類を行ったという感がない。この点については、収集語彙の全てを分類していないことから指摘できる。また、水野義道 (1988) は「英語に借用された日本語は語彙に限られ、そのほとんど全てが名詞である。そして、その多くは『モノ』を表わす名詞である。」としている。しかし、水野の言う「多く」は主観的、相対的な程度副詞であり、客観性に乏しい。

上記の問題点を踏まえ、本稿は水野が指摘したモノを表わす名詞が「多い」という論を本稿の仮説に立て、“The Oxford English Dictionary 2nd edition”^{*1} (以下はOEDと記す) に入った日本語起源の借用語彙を調査し、仮説の正否を検証する。詳しく分析すると「借用」はある事物に対して「接触・認識」し、その事物を受け入れる人間の行為現象である。つまり借用語の存在は、認識の内に何らかの事物を概念として受け入れた証である。一般的に普遍性が高ければ高いほど、事物は受け入れられやすいものと考えられる。モノの有・無、存在・非存在はトキ、トコロを選ばず明確であり、普遍性が高いと言える。この点から、モノを表わす借用語彙が多いという仮説を立てた。

先に指摘したように「多い」というのは主観的、相対的な程度表現であるため、本稿ではモノの相対概念にコトを用意した。コトは人間が考えて作り出した事象であるため、モノと比べて普遍性が低いと考えられる。『明鏡国語辞典』によるとモノは「空間に位置を占め、形をもち、実際に見たり触れたりできる対象。抽象的な動作・作用、状態・変化などをいう『こと（事）』に対する」概念であり、コトは「人間の意識や思考の対象となるもののうち、『もの』の性質・状態、変化、その関係など、抽象的な事柄をさす。実際に見たり触れたりすることのできる『もの』に対する」概念である。また、金田一春彦（1988）は「『もの』は目に見える形のあるもの、存在するすべてを言」い、「『こと』というのは抽象的に考えた対象すべてを言う」としている。したがって、モノとコトは相対する概念であると考えられる。そこで、本稿では相対概念であるモノとコトを表わす日本語起源の英語借用語彙について調査研究を行う。次に本研究における「借用語」の位置づけを詳細に示す。

3. 借用語と世界観の関係

借用語は言語Aから言語Bに輸入された語である。そもそも語は、世界を把握するために用いる手段または道具である。つまり、人類は語を用いて世界を切り分けて認識しているのである。「借用語」には必ず複数の言語が関わっている。複数の言語が存在するということが、複数の言語体系が存在するということである。それぞれの言語体系にはそれぞれの語が存在するのであるから、それぞれの言語を介した世界認識ないし、その世界認識の積み重ねによって形成される世界観も異なってくるのである。異なる世界観に跨って語の「借用」という行為を行った結果として、借用語が生じるのである。これまで見てきたことを総合すれば、借用語は語を借用するとともに世界認識の手段・方法を借用していることがわかる。

続いて、言語Aから言語Bへの語の借用プロセスとその定着過程を具体的に分析しておくこととする。言語Bの話者bが何らかの形で言語Aの「語」と接触する。この「新事象」および起源語との出会いこそが、「語」に対する話者bの接触・認識である。語に接触するというのは、能記（シニフィアン、記号表現）と所記（シニフィエ、記号内容）に接触することである。①言語Bに「語」が示す対象（所記・意味）が存在せず、話者bがその対象（所記・意味・世界観）を有用だと判断した場合は（音韻体系は起源語のままではないとしても）音（場合によっては文字表記）と意味がともに取り入れられる。つまり、能記も所記も借用される。この現象は「音訳借用法」と呼ばれている。②言語Bの語彙体系に「語」が示す対象（所記・意味）の類似対象があり、話者bが「語」の対象（所記・意味）を有用だと判断した場合は類似対象を示す語を用いて意識または音意結合を試みるであろう。これらは意識法や音意結合法などと呼ばれている。例えば、「一期一会」を“once in a life time”と意識したり、「神道」を“Shintoism”と音意結合したりする。③

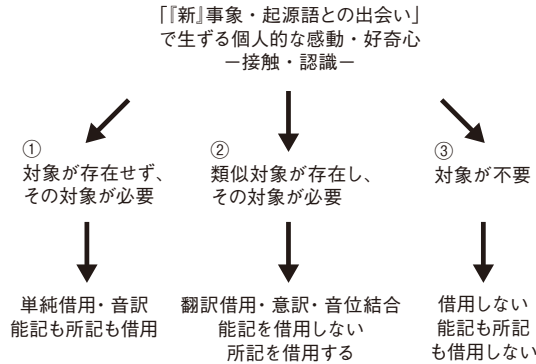


図1 語の借用プロセス

話者bが言語Aの「語」の示す対象（所記・意味）を必要としない場合は、所記はもちろん能記も借用されない。この際には、言語Bの語彙体系に「語」の示す対象またはその類似対象が存在するか否かが問われることもない。①②③に挙げた過程で語を借用し、定着させるか否かを判断するとともに、異なる言語体系が持つ世界の認識方法を用いて新たに世界の切り分けを行うか否かを判断していると言える。加えて言えば、これらの判断は一般的に無意識の内に行われるものである。

もちろん、例外もある。言語Bの語彙体系に言語Aの「語」の表す対象（所記・意味）やその類似対象が存在している場合でも、敢えて言語Aの「語」の能記（音または表記）を採用することもある。例えば、“bus（バス）”を「乗合自動車」が存在していたにもかかわらず（音韻体系は起源語のままではないが）「バス」と音訳という形で能記を借用している。「パソコン」などの語が存在しているにもかかわらず、“PC”という語を輸入したように音のみならず文字表記をも取り入れることがある。これら例外にあげたケースは、すべて意識的に起源語の音や文字表記を取り入れようとしている。この種の例外現象について本研究ではCannon（1992）、林伦伦・陈慨丽（2000）、早川（2003, 2005）の言うように輸入先言語の語彙体系への定着度合いの深化に応じた変化であると考えられる。これまで見てきたように、語の借用には世界認識の手段・道具の伝播が伴うものであると捉えて本研究を進めていくこととする。

4. 語彙収集の方針とその結果

本研究の最終目的は英語が認識する東アジア像の探求である。具体的な対象には英語の借用語彙を扱うこととする。それは、世界の諸言語において英語は最も代表的な言語の一つであると考えられるからである。“Ethnologue Languages of the World 16th edition”^{*2}の2009年の統計によると世界の母語話者数では中国語、スペイン語より劣るが、公用語人口としては英語は世界最多である^{*3}。意思の疎通が可能な国や地域を考慮すると、英

語は世界でもっとも広く通用する言語だと考えられている*⁴。その証として、第二言語（ESL = English as a second language）として用いる人口が約4億人に上っていることがあげられる。これはイギリス、アメリカの影響で商業英語が確立され、プログラミング言語など科学技術の上でも主要な役割を持ったことなどに起因していると考えられる。インターネットの発展とグローバル化の進展によりヒト・モノ・情報の移動が加速し、数も増えているため、今後も引き続き世界中でますます英語の利用度が高まっていくものと想像される。

実際の語彙の収集対象はOEDの見出し語で、本稿では由来が日本に起源を持つと明記された音訳借用語とする。英語の辞書においてOEDは伝統、編集者、収録語などの面において信頼が最も高い辞書の一つであると認められるからである。この点については、高橋（2008）が「今日でもOEDは世界最大規模で、もっとも権威のあるいわば英国の国語辞典であり、「英国の辞書編纂の歴史は、このOED第2版の刊行で頂点を極めたといつてよい」と述べていることからわかる。

本研究では、音訳法で借用された語のみを収集することとする。音訳借用法の語彙は能記も所記も起源語およびその語が表わす世界観を直視しようとしている意思が明らかであるからである。

合成語や語尾変化など英語化した語彙、意識法、音意結合法を用いて借用された語は研究の対象としない。それは、既に英語化過程に入っているか、少なからず英語の発想が加えられているからである。収集しない合成語の例としては、“urushiol”や“shogaol”の“-ol”が挙げられる。これは「油性や溶剤類の化学物質」を示す英語の接尾辞である。また“Okinawan”のように、“Okinawa（沖縄）”の音と“-an（「人」または形容詞化する接尾辞）”は音意結合された語とも合成語とも考えられる。また、“spring roll（春巻）”のように意識された語も収集対象外とした。その他、発明後に名付けられる際に起源語よりは英語の発想に近いと思われる表現を用いた語も研究対象からはずしている。例えば、永井一雄が1902年に植物の根や茎から分離し、取り出した“rotenone（「ロテノン」）”や竹本常松が1962年に「イボテングダケ」から世界で初めて抽出した“ibotenic acid（「イボテン酸」）”などである。これらの語彙は、発明者の母語を語源としているか否かを特定することが極めて困難である。

この収集方針に則って実際に収集した結果、OEDに見出し語として記載された日本語を起源にした英語の借用語彙は427語であった。

5. 語彙分類の方針とその結果

本稿は日本語から英語に入った借用語彙の中でもモノとコトの借用状況を検討するものであるため、語彙の分類も意味の上からモノとコトに分ける必要がある。モノとコトの分類基準については、先行研究の項で記した『明鏡国語辞典』および金田一春彦（1988）を

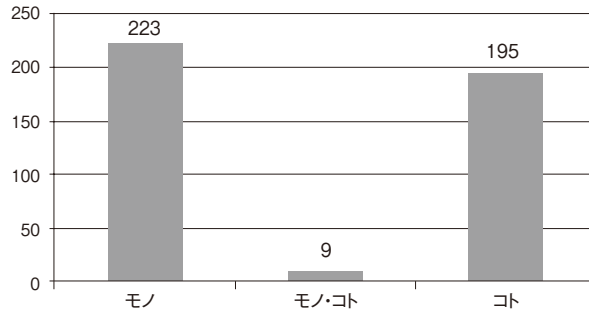


図2 OEDの見出し語に見る日本語起源の英語借用語が表わすモノとコトの語彙数

援用するものとする。モノとコトとに分類する際は起源語の意味ではなく、OEDに記載された第一義を用いることとする。しかし借用された語には多義を持つものがある。そのため、第一義の中でもモノとコトのいずれかに単純に区分できない語彙がある。これらの語彙については、「モノ・コト」を合わせた範疇を設けて分類した。例えば、“yokozuna (横綱)”はOEDに“A grand champion sumo wrestler”と記載されており、“A grand champion”と“sumo wrestler”が同格の関係で定義されている。これは「グランドチャンピオンの相撲取り」というひとつまりモノとして捉えることもできるし、同時に「相撲取りのグランドチャンピオン」という地位として理解することもできる。そのため、モノ・コトに分類した。

以上の方針に従って収集および分類した結果、OEDの見出し語でモノとコトを表わす日本語起源の英語借用語はそれぞれ図2に示すような数であった。モノを指す語は223語、モノとコトの双方を表わす語は9語、コトを示す語は195語が存在した。

6. 調査結果の分析

OEDの見出し語で記載された日本語に起源を持つ英語借用語の総数は427語であった。総数を100%とした場合、図3に示すようにモノを示す語は52.22%、モノ・コトを示す語は2.11%、コトを示す語は45.67%を占めた。このデータからモノを示す語彙の数が過半数を超えていることがわかる。このことから、「多くは『モノ』を表わす」という本稿の仮説および水野の記述が「正しかった」と言うことができる。

モノが多かった理由として、普遍性・客観性が高いものほど受け入れられやすい、または場合によっては受け入れざるを得ないことが考えられる。日本列島の太平洋側を南から北へ流れる暖流の“Kuroshio (黒潮)」、地名の“Ryukyu (琉球)”は固有名詞である。これらの語が新語として借用される場合は後に別名を付けにくい。また当初は英語圏に存在していなかった「nandin (南天)」「sakura (桜)」などは日本を原産地または経由地として、そのモノの伝播とともに名称も同時に移っていったものと考えられる。

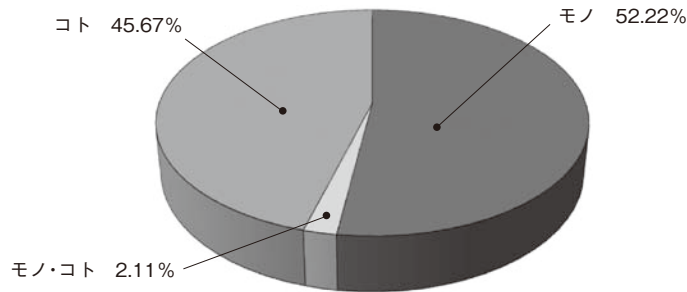


図3 OEDの見出し語に見る日本語起源の英語借用語が表わすモノとコトの比率

しかし一方で、モノを示す語が圧倒的に多かったわけではないことも指摘できる。仮説設定時は、モノを表わす借用語彙の数がコトを示す借用語彙の数よりも遥かに多いと考えていた。それはコトが人間の意識や思考の対象であり、なかでも抽象的な事象を表わす主観的なものであるため、モノと比べて普遍性の度合いも客観性の程度も低いからである。東アジアの日常生活における合理的な事象が、欧米の人々にとっては非合理的な事象であると捉えられることもある。当初は、欧米人にとってその非合理性が濃ければ濃いほど受け入れがたいと判断するに違いないと考えていた。例えば、生産性向上のために絶えず改良を続ける経営思想ないし企業哲学である「kaizen (改善)」、陰陽五行説に見られる法則の一つで、鬼が出入りする方角を指す「ki-mon (鬼門)」、元の船を沈没させ、第二次大戦時にも吹くと信じ込んでいた「神」の力による「kamikaze (神風)」はいずれもその社会基盤に根ざした人々に特有の思考様式の上に成り立っているものである。これらは異なる言語を持つ社会基盤に住む人々にはなかなか受け入れられにくいものであると考えていた。今回の調査結果で、モノとコトを示す借用語には大きな差 (6.55%) が見られなかった。むしろ、コトについてもモノを示す語とほぼ同程度に音訳借用されていると言うこともできる。この点から、異なる言語話者に染み付いた独特の行為、思考様式、習慣、芸術、システムなどに支えられた現象が従来より持つ認識と離れているからこそ、その現象に対して驚き、感動し、興味を持ち、それを表わす語を借用する意欲が出たのであろうと考えるようになった。

7. まとめと将来展望

本稿の結論として、OEDの見出し語に採用された日本語を起源に持つ英語の音訳借用語について、モノを指す語は223語 (収集語彙総数の52.22%)、モノとコトの双方を表わす語は9語 (収集語彙総数の2.11%)、コトを示す語は195語 (収集語彙総数の45.67%) が存在した。このデータから①モノを表す借用語彙が多いことと②コトを表わす借用語彙が圧倒的に少ないとは言えないことがわかった。

本稿は日本語から英語に入った借用語彙を取り上げたが、今後も東アジアを起源とする英語の借用語彙の研究を重ねていきたい。今日の国際状況を見ると、モノ、カネ、ヒトの往来が日に日に活発になっている。加えて情報化社会の進展により、瞬時にして情報が世界を行き交っている。この現状を踏まえると、今後も借用語はかつてないスピードで各言語に増えて続けていくことであろう。世界の各言語に借用語が増えていくということは、各言語を用いる人々の世界認識の手段・道具が共有されつつあるということになるため、将来はますます人類の世界観が融合されていくのではないかと想像される。

8. 付 録

OEDの見出し語に記載された日本語起源の借用語リストを掲載しておく。英語表記については、見出し語以外にも複数の綴り方が記載されている語がある。しかし、本研究では見出し語の綴り方のみを採用することとする。なお、表中の1はモノ、2はモノ・コト、3はコトを表わしている。

1	adzuki	小豆
1	Akebia	アケビ
1	ama	海女
1	amado	雨戸
1	aucuba	青木葉
1	awabi	鮑
1	baren	馬連
1	bekko	鼈甲
1	bento	弁当箱
1	bento	弁当
1	Betamax	ベータ・ビデオ
1	bonsai	盆栽
1	bonze	坊主(僧)
1	dashi	だし(汁)
1	dotaku	銅鐸
1	edamame	枝豆
1	Eta	穢多
1	furo	風呂
1	fusuma	襖
1	futon	布団
1	gaijin	外人
1	geisha	芸者
1	Genro	元老
1	geta	下駄
1	gobang	碁盤
1	Godzilla	ゴジラ
1	gyoza	ギョウザ
1	habu	ハブ
1	habutai	羽二重

1	hakama	袴
1	hamachi	ハマチ
1	hanashika	嘶家
1	haniwa	埴輪
1	haori	羽織
1	happi-coat	法被
1	hatamoto	旗本
1	hechima	糸瓜
1	heimin	平民
1	hibachi	火鉢
1	hijiki	ひじき
1	hinin	非人
1	hinoki	桧
1	honcho	班長
1	hoochie	家
1	inro	印籠
1	ishikawaite	石川石
1	izakaya	居酒屋
1	jandal	サンダル
1	jinricksha	人力車
1	johachidolite	上八洞石
1	Jomon	縄文
1	joro	女郎
1	kago	籠
1	kakemono	掛け物
1	kaki	柿
1	Kakiemon	柿右衛門
1	kana	仮名
1	katana	刀

1	katsuo	鰹
1	katsura	鬘
1	kaya	蚊帳
1	keyaki	欒
1	Kikuchi	菊池線
1	kikyo	桔梗
1	kimono	着物
1	kiri	桐
1	kirin	麒麟
1	kobang	小判
1	Kobe	神戸ビーフ
1	kobeite	河辺石
1	koi	鯉
1	koi-cha	濃い茶
1	koji	麹
1	kokeshi	こけし
1	kombu	昆布
1	koniak	蒟蒻
1	koro	香炉
1	kotatsu	炬燵
1	koto	琴
1	kudzu	葛
1	kura	蔵
1	kuruma	車
1	magatama	勾玉
1	maiko	舞妓
1	makimono	巻き物
1	makiwara	巻き藁
1	mama-san	ママさん

1	matsu	松
1	mebos	梅干し
1	metake	女竹
1	mikan	蜜柑
1	miso	味噌
1	mitomycin	ミトミシン
1	mitsumata	三椏
1	mochi	餅
1	mokum	木目
1	mompei	もんぺ
1	mousmee	娘
1	moxa	艾
1	nakodo	仲人
1	nandin	南天
1	nandina	南天(竹)
1	narikin	成り金
1	Nashiji	梨子地
1	netsuke	根付け
1	ninja	忍者
1	nisei	二世
1	nori	海苔
1	norimon	乗り物
1	noshi	熨斗
1	nunchaku	ヌンチャク
1	obang	大判
1	Obento	お弁当
1	obi	帯
1	oiran	花魁
1	ojime	緒締め
1	okimono	置き物
1	onnagata	女形
1	orihon	折り本
1	oshibori	おしぼり
1	oyama	おやま
1	pachinko	パチンコ
1	pan-pan	パンパン
1	ponzu	ポン酢
1	raku	楽焼
1	ramanasu	浜茄子
1	ramen	ラーメン
1	rishitin	リシチン
1	Rōjū	老中
1	ronin	浪人
1	Roshi	老師
1	rumaki	春巻き
1	ryokan	旅館
1	sai	サイ(古武道の武器)
1	saké	酒
1	sakura	桜
1	samisen	三味線
1	samurai	侍

1	sanpaku	三白眼
1	sansei	三世
1	sasanqua	山茶花
1	sashimi	刺身
1	seitan	セイトン
1	sen	銭
1	sennin	仙人
1	sensei	先生
1	sentoku	宣徳
1	shabu-shabu	しゃぶしゃぶ
1	shakudo	赤銅
1	shakuhachi	尺八
1	shibuichi	四分一
1	shiitake	椎茸
1	shikimi	シキミ
1	shimose	下瀬火薬
1	shippo	七宝
1	shishi	獅子
1	shiso	紫蘇
1	shō	笙
1	shochu	焼酎
1	shogun	将軍
1	shoji	障子
1	shoyu	醤油
1	shubunkin	(金魚の)朱文金
1	shuriken	手裏剣
1	sika	鹿
1	skimmia	楮
1	soba	蕎麦
1	sodoku	鼠毒
1	sokaiya	総会屋
1	soroban	算盤
1	soshi	壮士
1	soy	醤油
1	sudoite	須藤石
1	Sudoku	数独
1	sugi	杉
1	suimono	吸い物
1	sukiyaki	すき焼き
1	sumi	墨
1	sumi-e	墨絵
1	sumotori	相撲取り
1	surimi	すり身
1	surimono	刷り物
1	sushi	寿司
1	suzuribako	硯箱
1	tabi	足袋
1	tachi	太刀
1	tai	鯛
1	Tamagotchi	たまごっち
1	tamari	たまり醤油

1	tansu	箆笥
1	tanto	短刀
1	tatami	畳
1	temmoku	天目
1	tempo	天保通商
1	tempura	天ぷら
1	teppan-yaki	鉄板焼き
1	teriyaki	照り焼き
1	tofu	豆腐
1	Tojo	東条
1	tori	(柔道の)取り
1	torii	鳥居
1	toro	とろ
1	tsuba	鑿
1	tsukemono	漬物
1	tsutsugamushi	つつがむし
1	uchiwa	団扇
1	udon	うどん
1	uguisu	うぐいす
1	uke	受け
1	ukiyo-e	浮世絵
1	urushi	漆
1	wacadash	脇差
1	Wagyu	和牛
1	wakame	ワカメ
1	wasabi	わさび
1	washi	和紙
1	yakitori	焼き鳥
1	yakuza	やくざ
1	yashiki	屋敷
1	yukata	浴衣
1	yuzu	柚子
1	zabuton	座布団
1	zori	草履
2	anime	アニメ
2	iroha	いろは
2	jito	地頭
2	Kuroshiwo	黒潮
2	muraji	連
2	omi	臣
2	onsen	温泉
2	shugo	守護
2	yokozuna	横綱
3	aikido	合気道
3	bai-u	梅雨
3	banzai	バンザイ
3	basho	(大相撲の)場所
3	budo	武道
3	burnraku	文楽
3	bushido	武士道
3	cosplay	コスプレ

3	daimio	大名
3	dairi, dayro	内裏
3	daisho	(刀の)大小
3	dan	段
3	dojo	道場
3	gagaku	雅楽
3	go	(閑)碁
3	haiku	俳句
3	hanami	花見
3	harai goshi	払い越し
3	hara-kiri	腹切
3	Heian	平安
3	hiragana	平仮名
3	ikebana	生け花
3	inkyo	隠居
3	ippon	一本
3	itai-itai	イタイイタイ病
3	itzebu	一部
3	janken	ジャンケン
3	jigotai	自護体
3	Jōdo	浄土
3	jōruri	浄瑠璃
3	judo	柔道
3	ju-jitsu	柔術
3	juku	塾
3	junshi	殉死
3	kabane	姓
3	Kabuki	歌舞伎
3	kagura	神楽
3	kaiseki	懐石
3	kaizen	改善
3	kakke	脚気
3	kami	お上
3	kamikaze	神風
3	kanban	看板
3	kanji	漢字
3	karaoke	カラオケ
3	karate	空手
3	karoshi	過労死
3	kata	(柔道の)型
3	katakana	カタカナ
3	katsuramono	鬘物
3	Kempeitai	憲兵隊
3	ken	拳
3	ken	県
3	ken	間
3	kendo	剣道
3	kesa-gatame	袈裟固め
3	ki	気
3	ki-mon	鬼門
3	koan	公案

3	kogai	公害
3	koku	石
3	Kuge	公家
3	Kumon	公文
3	kuzushi	(柔道の)くずし
3	kyogen	狂言
3	kyu	級
3	kyudo	弓道
3	manyogana	万葉仮名
3	matsuri	祭り
3	Meiji	明治
3	miai	お見合い
3	Mikado	帝
3	mingei	民芸
3	mon	紋
3	mondo	問答
3	mura	村
3	Nanga	南画
3	Nikkei	日経
3	ninjutsu	忍術
3	Nippon	日本
3	nogaku	能楽
3	Noh	能
3	Obaku	黄檗
3	o-goshi	大腰
3	on	恩
3	origami	折り紙
3	osaekomi waza	押え込み
3	O-soto-gari	大外刈り
3	randori	乱取り
3	reiki	霊気
3	renga	連歌
3	ri	里
3	rikka	立花
3	rin	厘(通貨単位)
3	Rinzai	臨済宗
3	Ritsu	(戒)律
3	robata-yaki	炉端焼き
3	romaji	ローマ字
3	ryo	両(通貨単位)
3	ryu	流
3	Ryukyu	琉球
3	sabi	寂び
3	san	〇〇さん
3	satori	悟り
3	sayonara	サヨナラ
3	seiza	正座
3	seoi nage	背負い投げ
3	seppuku	切腹
3	sewamono	世話物
3	shaku	尺

3	shiatsu	指圧
3	shibui	渋い
3	Shihan	(柔道の)師範
3	shime-waza	絞め技
3	Shin	浄土真宗
3	Shingon	真言宗
3	Shinkansen	新幹線
3	Shinshū	浄土真宗
3	Shinto	神道
3	sho	升
3	shodan	商談
3	shogi	将棋
3	shokku	ニクソン・ショック
3	Shorin ryu	少林流
3	shosagoto	所作事
3	shosha	商社
3	Shotokan	松涛館
3	Showa	昭和
3	shunga	春画
3	shunto	春闘
3	shuto	手刀
3	skosh	少し
3	sogo shosha	総合商社
3	Sohyo	総評
3	Soka Gakkai	創価学会
3	sosaku hanga	創作版画
3	Soto	曹洞宗
3	suiboku	水墨
3	suiseki	水石
3	sumi-gaeshi	(柔道の)隅返し
3	sumo	相撲
3	sun	寸(長さ)
3	sutemi-waza	(柔道の)捨て身技
3	Suzuki	鈴木式音楽教育
3	tai-otoshi	体落とし
3	Takayasu	高安病
3	tan	反(布の大きさ)
3	tan	反(田畑の広さ)
3	Tanabata	七夕
3	tanka	短歌
3	tataki	たたき
3	Tendai	天台宗
3	tenko	点呼
3	terakoya	寺子屋
3	to	斗
3	togidashi	研ぎ出し
3	tokkin	特金
3	tokonoma	床の間
3	Tokugawa	徳川
3	tomoe-nage	巴投げ
3	tonari gumi	隣組

3	tsubo	坪
3	tsugi ashi	継足
3	Tsukahara	塚原
3	tsukuri	(柔道の)作り
3	tsunami	津波
3	tsurikomi	つりこみ
3	tsutsumu	包む
3	tycoon	大君
3	uchimata	内股
3	ude-garami	(柔道の)腕がらみ
3	uji	氏
3	ujigami	氏神

3	ukemi	受身
3	uki	うき
3	umami	旨味
3	ura-nage	裏投げ
3	uta	歌
3	wabi	侘び
3	waka	和歌
3	waza-ari	技あり
3	Yamaguchi-gumi	山口組
3	Yamato	大和
3	yen	円
3	yoko-shiho-gatame	横四方固め

3	yondan	四段
3	yugen	幽玄
3	yusho	油症
3	zaibatsu	財閥
3	zaikai	財界
3	zaitech	財テク
3	zazen	座禅
3	Zen	禅(道)
3	zendo	禅堂
3	Zengakuren	全学連

9. 注 釈

- * 1. Oxford English Dictionary Second Edition on CD-ROM (v. 4.0), Oxford University Press 2009
- * 2. Ethnologue Languages of the World “Statistical Summaries”
“Table 3. Languages with at least 3 million first-language speakers”
http://www.ethnologue.com/ethno_docs/distribution.asp?by=size#3 (2012.07.17. 参照)
- * 3. 『なるほど知図帳世界2009』昭文社、2008年
- * 4. “Future of English”. The British Council. Retrieved 2011-08-24. (page 10)
<http://www.britishcouncil.org/learning-elt-future.pdf> (2012.06.23. 参照)
Wikipedia 「英語」の項目
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%8B%B1%E8%AA%9E#.E8.8B.B1.E8.AA.9E.E4.BA.BA.E5.8F.A3>
(2012.06.23. 参照)

10. 参考文献・引用文献

- Christopher P. Carman (1991) ‘Japanese Loanwords in English’ “The UOEH Association of Health Science” 13 (3) pp.217-226
- Garland Cannon (1992) “Malay (sian) Borrowings in English” American Speech vol.67 pp.134-162
- Nichlas W. WARREN (1994) ‘Japanese Loanwords Contemporary English -Part One: Martial Japanese-’ 『福岡女子短大紀要』 vol.48 pp.1-14
- Nichlas W. WARREN (1995a) ‘Japanese Loanwords Contemporary English -Part Two: Flora and Fauna-’ 『福岡女子短大紀要』 vol.49 pp.1-17
- Nichlas W. WARREN (1995b) ‘Japanese Loanwords Contemporary English -Part Three: Science-’ 『福岡女子短大紀要』 vol.50 pp.33-47
- Nichlas W. WARREN (1996) ‘Japanese Loanwords Contemporary English -Part Four: Business-’ 『福岡女子短大紀要』 vol.51 pp.33-45
- Nichlas W. WARREN (1997) ‘Japanese Loanwords Contemporary English -Part Five: Made in Japan-’ 『福岡女子短大紀要』 vol.52 pp.25-40
- Oxford English Dictionary Second Edition on CD-ROM (v. 4.0), Oxford University Press 2009
- 林伦伦・陈概丽(2000) ‘现代英语中的汉语借词说略’ “辽宁大学学报(哲学社会科学版)” 第28卷第2期 pp.34-37

- 刘海霞 (2009) ‘英语中的日语词汇借用规律探微’ “赤峰学院学报” 第30卷 第9期 pp.86-88
- 葛西清蔵 (2008) 「借用語から見えてくる心の世界 英語と日本語の場合」『文化と言語』 vol.68 pp.26-49
- 加野まきみ (木村まきみ) (2003) 「英語における日本語・ドイツ語からの借用語 - 定着過程にみられる変化の類似・相違 -」『文化女子大学室蘭短期大学研究紀要』 vol.26 pp.45-58
- 北原保雄 (2006) 『明鏡国語辞典 携帯版』 大修館書店 p.590, p.1,638
- 金田一春彦 (1988) 『日本語 (上)』 岩波新書 p.142
- 高橋留美 (2008) 「①辞書編纂の歴史 英語」『世界のことば・辞書の辞典 ヨーロッパ編』 石井米雄 編 三省堂 p.296
- 水野義道 (1988) 「6 外国語に入った日本語」『日本語近代百科大事典 縮刷版』 金田一春彦・林大・柴田武 編 大修館書店 pp.1,033-1,038
- 早川勇 (2003) 「英語に入った日本語語彙の初出年調査」『日本語科学』 vol.13 pp.79-108
- 早川勇 (2004) 「海を越えた日本語の履歴 (1)」『愛知大学語学教育研究室紀要 言語と文化 (11)』 通巻第38号 pp.51-66
- 早川勇 (2005a) 「海を越えた日本語の履歴 (2)」『愛知大学語学教育研究室紀要 言語と文化 (12)』 通巻第39号 pp.97-112
- 早川勇 (2005b) 「英語に入った日本語の同化度 - 1990年における -」『言語と文化』 vol.13 pp.1-22
- 早川勇 (2006) 「英語に入った日本語の来歴と特徴」『英語になった日本語』 春風社 pp.17-186
- 町田健・初山洋介 (1995) 『日本語教師トレーニングマニュアル③ よくわかる言語学入門』 バベル・プレス出版社
- 松本直枝 (1999) 「AHD³に見られる日本語、韓国語、中国語からの借用語」『OLIVA』 No.6 pp.111-124

(ちん えいき・中国瀋陽 東北大学中日文化比較研究所研究員／やまだ こうしろう・中国瀋陽 東北大学中日文化比較研究所研究員 (五十音順))